

一 稲荷町の歴史 一

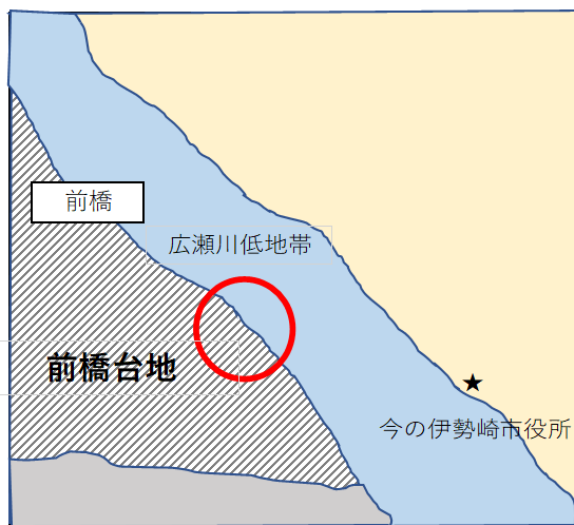
【はじめに】

群馬県伊勢崎市稲荷町は伊勢崎では最西端にある小さな町です。この町は、どんな歴史を経て今があるのでしょうか。それを知ることは、昔の人々がつないできた時の重さを知ることと思います。

ここでは稲荷町に在住する郷土史家百瀬登良雄氏が主宰した稲荷町歴史散歩の会等の資料をもとに、また岡本克則氏が平成30年に稲荷町作品展に出した「稲荷町いまむかし物語」の冊子の主に歴史の部分の資料を借り稲荷町の歴史を紐解くとします。

【古墳時代（3世紀中頃～7世紀）の稲荷町】

古代の稲荷町は古い利根川の右岸にあって、今から約2万4千年前に形成されたといわれる前橋台地の先端に位置しました。



左図は前橋台地の図ですが、斜線部分が前橋台地、青は広瀬川の低地帯です。○の付近が稲荷町の位置にあたると思われます。

この前橋台地には、先端部に前橋二子山古墳や東日本最古といわれる前橋天神山古墳があり、それに続くさらに最先端に稲荷山古墳群がありました。この地区はその古墳群の多さからみて早くから開拓された所と考えられます。

(古墳については資料Ⅰ)

【奈良平安時代（710～1185）の稲荷町】

この時代、この地域は那波の郡の一部で委文郷（しどりごう）といい、上之宮、下宮、樋越、福島、今がありました。

その「今」と呼ばれた地区が今の稲荷町の地区です。この地区は、当時の利根川のたびたびの氾濫、流路の変更で人々が移動を余儀なくされ新しく住居を移動し落ち着いた場所を「今の場所」という意味で「今」と呼ばれ始めたというのです。「新たな」と同じ意味で「今」と呼んだようです。

【鎌倉時代（1185～1333）の稲荷町】

この時代の稲荷町を知るには、この地を治めた那波氏から始めなければなりません。

建久四年（1193年）五月十日源頼朝の庶子といわれる大江広元の第三子政廣が源頼朝公より那波・佐位両郡の六十六邑（むら）を賜り此の地を支配しました。これが那波氏の始まりですが、委文郷の「今（今村）」も領有され、この形が約400年続きます。

【室町、安土桃山時代（1336～1603）の稲荷町】

この那波氏は小泉城を築き数代在城しましたが應永年間（1394～1427）に利根川の大洪水により城が壊れ堀口に新しい城（那波城）を築いて移り領内を統治しました。さらにいくつかの城を築きました。その一つが今も稲荷町に碑が残る今村城です。

今村城は稲荷山古墳群の1つ稲荷山（古城）古墳の上に作られます。また、伝わるところによれば信州の稲荷山（長野県更科郡稲荷山）からこの地に移り住んだ人達が故郷の稲荷大明神をこの今村城に祀ったことから今村を稲荷山、城も稲荷山城とも呼んだということです。

永禄年間（1558年～1572年）那波氏の当時の居城赤石城が太田金山城主の由良成繁に奪われた後は今村城が那波氏の当主顕宗（あきむね）の居城となりました。しかし天正18年3月6日（1590年）越後の上杉勢に攻められ、今村城は落城しました。その後、顕宗主従は上杉景勝に従い（天正18年8月2日、または10月2日とも）九戸（くのへ）の戦いで討ち死にしたと伝えられています。

（今村城については資料Ⅱ）

【江戸時代（1603～1868）の稲荷町】

徳川幕府の時代となり、「今村」は上野国那波郡今村として慶長6年（1601年）前橋藩の領地となります。その後、寛永14年（1637年）伊勢崎藩の領地となります。当時今村の石高は千百石であったといえます。

さらに寛文2年（1662年）には今村は3村（上今村、中今村、下今村）に分かれ、これが明治時代まで続きました。

【明治時代（1868～1912）の稲荷町】

明治4年（1871年）、分かれていた3村（上今村、中今村、下今村）がまとまり群馬県那波郡今村となりました。

さらに、明治22年（1889年）宮郷村の成立にともない群馬県那波郡宮郷村大字今となり、明治29年（1896年）には佐位郡、那波郡が統合され佐波郡となると群馬県佐波郡宮郷村大字今となりました。

【大正・昭和・平成・令和の稲荷町】

この近現代の時代、日本は昭和16年（1941年）に太平洋戦争に突入。この地区でも多くの若者が戦地に行きました。終戦の日の前日（8/14夜）アメリカ軍の空襲が伊勢崎市街地にあり、この地区にも今村神社の北西に焼夷弾が落下したといえます。また、戦後まもない昭和22年カスリーン台風襲われ洪水による被害もありました。昭和30年（1955年）3月末に宮郷、三郷、豊受、名和の4村が伊勢崎市に入り、古くからの別名「稲荷山」から群馬県伊勢崎市稲荷町となりました。以来、経済成長と共に災害も少ない地域として落ち着いた時代を経て現在に到っています。

※稲荷町データ

地理・・・◇位置（町の中央にある稲荷町集落センター）

北緯36度19分 東経139度08分 標高 68.7m

◇大きさ 南北2.2Km 東西1.3Km 面積1.88平方キロ

（上記の大きさは地図から計測した参考値です）

人口・・・天保元年（1830年）・・・103軒、496人

明治10年（1878年）・・・151軒、690人

令和3年（2021年）・・・611軒、1415人

----- 以下資料 -----

※資料Ⅰ 古墳について

昭和10年、当時の君島群馬県知事が古墳を保護する目的で「上毛古墳綜覧」という

町 村	前方後円墳	円形古墳	形式不明	古墳総数
伊勢崎町	0	6	0	6
殖蓮村	7	304	27	338
茂呂村	0	46	0	46
三郷村	5	100	0	105
宮郷村	4	15	0	19
名和村	0	0	0	0
豊受村	0	0	0	0

本をまとめました。この本によれば伊勢崎市の旧村町別の古墳の数は左表の通りです。

表の通り多くが広瀬川左岸及び粕川の流域に集中して分布していますが、宮郷村の19の古墳のうち8号までが稲荷町地区に存在しました。

下図は昭和40年（1965年）の稲荷町地図に小字（こあざ）と8個の古墳の位置を▲で岡本克則氏が記入したものです。



図の中央やや上にある▲の1号墳（稲荷山(古城)古墳）は前方後円墳であり、その上に後の今村城が築城されました。2号墳竹薬師古墳、3号墳杉薬師古墳、4号墳広街古墳、5号墳大山古墳、6号墳大山古墳、7号墳畑直し古墳、8号墳畑直し古墳があり、いずれも7世紀初頭、榛名の二ッ岳の噴火により古利根を通じて流出した浮石質

角閃石安山岩を加工して石室に使用してありましたが、昭和44年前橋南部土地改良事業実施に先がけて、古墳群の発掘調査をして整地してしまい、今は上之宮の北にわずかに残るのみです。

発掘調査については、1号墳（稲荷山古墳）は昭和5年（1930年）発掘調査され、「上毛及び上毛人」第160号に相川龍雄氏が詳細を書いています。また2号、3号、4号、8号の各古墳は昭和46年発掘調査され伊勢崎市文化財調査報告第1集「伊勢崎市稲荷町の古墳」として調査報告がなされています。

※資料Ⅱ 今村城について

今村城は那波氏十五代那波宗俊の築城（1400後半～1500年代初期?）といわれ本丸は東西110m、南北150m周囲より2～3m高い稲荷山台地の稲荷山（古城）古墳（前方後円墳）の上に築いた平城です。下図は今村城の図を山崎一氏が作図し、後に百瀬登良雄氏が写図したものです。



今村城の図の上部冒頭に百瀬氏が書いた添え書きを下記に記します。

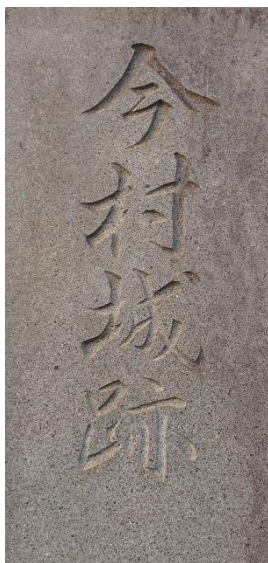
今村城は戦国時代 佐位那波
両郡を領有した那波氏の
居城の一つである。那波掃部介
大江政廣が建久四年五月十日
源頼朝公より賜り入郡したと
云われる。堀口城を本城とし小泉城
今村城、茂呂城、赤石城と各方面に出城を築き
今村城は、弘治元年討ち死にした(月日不詳)(新田攻)
十五代宗俊公の築城と云われる。城将は
長浜越前守、永祿年間赤石城が
大田金山城主由良成繁に奪れ後、那波
駿河守顕宗公の居城だったと云われる。
天正十八年三月六日(一五九〇年)越後上杉勢に
攻められ落城したと云われるが、其の後、顕宗公
主従は上杉景勝に従い九戸の戦いで出羽
国で討死と伝えられる(天正一八年十月十八日)
今村城主顕宗は滅亡した。
末子安寿丸は上杉景勝公御家
安田若狭守能元公の養子と
なり養父の後を継ぎ
上杉氏の重臣として景勝公
嫡男完勝其子綱勝公と二代
四三年間に渡り仕えた。
六代目貞廣に子がなくて(一七二一年)
那波氏の正統は貞廣で
終止を打ったと云われる。

元和八年(1622年)顕宗公三十三回忌を泉竜寺(市内芝町)で家臣団が供養を行いました。当時の記録に今村(稲荷町)関係者が九名ありました。

上今(柴田権右衛門、根岸角兵衛) 中今(中澤九郎兵衛、宮沢金右衛門)

下今(中澤伊左衛門、成川次右衛門、甘田左之助、甘田大炊助、竹内監物)

現在の稲荷町につながる者もいるだろうか。顕宗公の墓碑は、この泉竜寺境内に寛永元年(1789年)那波氏遺臣の末裔などにより建立されています。また、今村城跡には石碑と伊勢崎市教委による解説が置かれています(下図)。



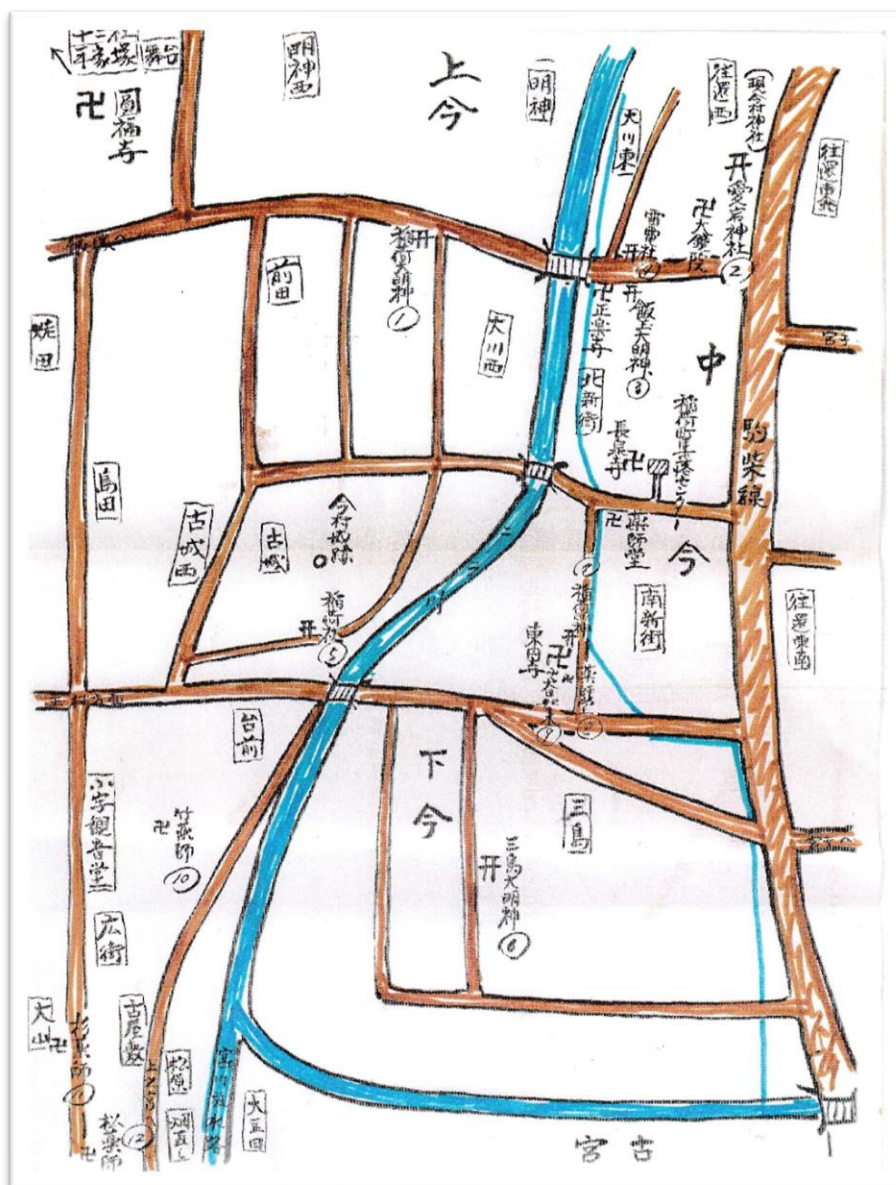
今村城跡
昭和四十一年四月十二日指定

今村城は、戦国時代に佐位、那波の両郡を領有した那波氏の居城の一つで、城郭は斐川の蛇行地点の北西に、東西南北約四〇〇メートルの範囲に縄張されたものです。本丸は台地を利用して三角状に築かれ、これを中心に輪郭式に詰郭が囲むものとなっていました。そして、本丸の三隅には古墳を利用した櫓台があつたと伝えられています。伊勢崎風土記によれば、那波宗俊が築城したものと伝え、天正期に一時、上杉勢の金山城攻撃の拠点となりました。耕地整理以前は土囲いや堀跡などが確認できましたが、現在は本丸跡のみがわずかにその痕跡を残しています。現存する城郭遺構の少ない中世平城遺構として、大変貴重なものとなっています。

平成二年三月十五日
伊勢崎市教育委員会

※資料Ⅲ 中近世の稲荷町の寺社

中近世（鎌倉時代～江戸時代（1537～1865））において、この稲荷町地区には多くの寺院、小社がありました。主な寺院は現存する圓福寺をはじめ大鏡院、正楽寺、長泉寺、東圓寺の五寺。また、社は天保二年（1831年）当時の伊勢崎藩調べによれば稲荷大明神、愛宕神社、飯玉大明神、雷電社、稲荷社、三島大明神、稲荷明神、薬師堂、大日如来、竹薬師、杉薬師、松薬師、等があったということです。下記は百瀬登良雄氏が書いた当時の寺社の位置を今の地図に示した図です。



(あとがき)

ここに記した稲荷町の歴史は、ほんの概要であって濃密な日々の生活の営みが繰り返されて今の稲荷町が作られてきたと思います。お読み頂いた方に、少しでも稲荷町の歴史を振り返る参考となれば幸いです。(令和4年1月 文責 中澤 治)